

大学への帰属感を高める全学的教育プログラムの開発

著者名(日)	川上 正浩, 坂田 浩之, 佐久田 祐子, 奥田 亮
雑誌名	大阪樟蔭女子大学
巻	7
ページ	21-26
発行年	2017-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1072/00004070/



大学への帰属感を高める全学的教育プログラムの開発

学芸学部 心理学科 川上 正浩 学芸学部 心理学科 坂田 浩之
学芸学部 心理学科 佐久田祐子 学芸学部 心理学科 奥田 亮

要旨：大学生活に対する充実感を感じるためには、学生の大学への帰属感が高まることが重要である（佐久田他，2008）。このため筆者らは、先輩が語る VTR や教員の対談を交えた、特定学科（心理学科）対象の帰属感高揚プログラム『心理学と私』を考案・実施し、その効果を検証してきた（川上他，2010，2011，2012a，2012b）。そしてこのプログラムを、全学学生を対象としたプログラムに拡張し、全学対象帰属感高揚プログラム『大学と私』として考案・実施し、その効果を検証している。たとえば佐久田・奥田・川上・坂田（2014）は特定の学科の先輩が語る VTR（同学科 VTR）と、同大学の先輩が語る VTR（同大学 VTR）を用いた帰属感高揚プログラムを異なる年度に実施し、それぞれのプログラムに対する参加者の印象評定を調査した。その結果、いずれの VTR 刺激もおおむね変わらず効果をもつことが示された。これらの研究を踏まえ、筆者らは VTR を刷新するなど『大学と私』を改良した。本研究では、この改良した全学対象のプログラムと特定の学科を対象としたプログラムとを、その前後の帰属感や大学生活充実度の変化の観点から比較した。その結果、改良された全学プログラムは、特定学科対象プログラムと同等の帰属感、大学生活充実度高揚の効果を持つことが示された。

キーワード：大学への帰属感、教育プログラム、全学プログラム、大学生活充実度、実践的研究

問題と目的

ライフサイクルにおける“大学時代”は、様々な経験を通して、自分らしさや自分とはどのような人間かについて考える時期であり、社会に出るための準備期間と位置づけられる（及川・坂本，2008）。大学生時代がこのような期間として十全に機能するためには、学生が大学生活に適応し、さらには、大学生活に主体的にコミットし、充実感を感じる事が重要な意味を持つと考えられる。たとえば山田（2009）は、同志社大学高等教育・学生研究センターが実施している JCIRP（Japan Cooperative Institutional Research Program）の日本版大学生調査（JCIRP College Students Survey；JCSS）を用いた国公私立4年制大学8校の学生3,961人を対象とする調査の分析結果から、学生のラーニング・アウトカムを上昇させるには、大学生活全体が充実するような学生のエンゲージメントが不可欠であることを論じている。

学生が大学生活に主体的にコミットし、充実感を感じられるようにするためには、学生の大学への帰属感を高めることと、教員とのつながりを強めることが重要なポイントであることが、筆者らによる新入生オリ

エンテーションに関する一連の研究から強く示唆されている（佐久田・奥田・川上・坂田，2014）。

それでは、帰属意識を高めるためには、どのような方策が考えられるだろうか。帰属意識を高めるためには、所属集団の構成員との人間関係を形成することが重要であると考えられる。たとえば、高木（2003）は、従業員の会社への帰属意識を表す概念として組織コミットメント（organizational commitment）を取り上げ、その先行要因について検討した結果、組織コミットメントの内化要素（組織との一体感や同一視）には上司との人間関係が正の影響を及ぼし、愛着要素（組織に対する愛着）には上司との人間関係および同僚との人間関係が正の影響を及ぼすことを明らかにしている。この知見を学生の所属大学への帰属感に適用するならば、所属大学の教員や先輩、同学年の学生との人間関係を形成することで、学生の所属大学への帰属感が高揚すると予想される。

そこで、筆者らは、大学への帰属感と大学生活充実度を高める教育プログラムの開発に着手した。

川上・坂田・佐久田・奥田（2010，2011，2012a，2012b）は、まず心理学科（心理学部）に所属する

1 回生に対して、その帰属感を高揚させ、ひいては大学生生活の充実感を高めるプログラムを「帰属感高揚プログラム『心理学と私』」として考案・実施し、その効果を検証しつつ改良している。

『心理学と私』のプログラム構成については、以下の通りである（詳細は川上他，2012b 参照）。

学生が、教員に親密感を感じ、上回生や卒業生とのつながりを感じることができれば、帰属感は高揚すると予想される。したがってこのプログラムの目的は、心理学を学ぶことや心理学系学科で学ぶことの効用を伝えつつ、教員や上回生、卒業生とのつながりの意識・親密感を高めることによって、在学生の学部・学科に対する帰属意識を高揚させることとなる。このためプログラムは、卒業・在學生へのインタビュー・ビデオ（VTR）と、教員自らの心理学とのかかわりや大学生生活に関する語り（教員の対談）から構成された。

VTR 内容は、①心理学系学科の在學生や卒業生複数名が、「心理学を学ぼうと思ったきっかけ」「心理学に対する印象の変化」「心理学を学んで良かったこと・役立ったこと」「学生生活で一番心に残ったこと・しんどかったこと」「1 回生へのメッセージ」に関して、一問一答インタビューに答えた内容を収録したもの、②「ゼミ風景」として、実際に大学でゼミが行われている現場の映像を収録した映像、③心理学系学科卒業生が実際に職場で働いている（活躍している）様子の映像、の 3 種類を用いた。

①の VTR 撮影に際しては、在學生あるいは卒業生には、あらかじめ具体的な質問の内容を知らせず、一問一答式のインタビューに答えて欲しいとのみ依頼し、許可を得て撮影装置の前に着席を求めた。そのうえで筆者らが質問項目をフリップのように順次在學生あるいは卒業生に呈示した。したがって、その回答は、熟考したものというよりは、その場で思いつくものであったと言える。これらを適宜編集し、在學生であればインタビュー時の学年と所属ゼミ名、卒業生であれば卒業生であることと所属（卒業）ゼミ名をテロップで付加し、各質問項目について 3 分程度のクリップを作成した。

②の VTR については、実際のゼミに撮影装置を持ち込み、様々な形態（グループでのディスカッション、口頭でのプレゼンテーション、個人の論文作成作業過程）のゼミ風景を 3 分程度のクリップにまとめた。

③の卒業生の活躍 VTR は、卒業して様々な職種に就いている卒業生に依頼し、実際に職場で働いている様子を撮影すると同時に、職場で在學生あるいは卒業生インタビューと同様の一問一答式のインタビューを

実施した。これらを適宜編集し、職場で働いている風景をそれぞれ 5 分程度、インタビューについては全体で 3 分程度のクリップにまとめた。

教員の対談については、ライブ感を活かすために特段打合せをせず、3 名の教員が参加する鼎談の形をとった。教員自身が心理学を学んだきっかけ、大学生生活などについて、フリートークの形式で話した。

この『心理学と私』を、VTR の改良等を行いつつ、効果を測定したところ、プログラムの前後で帰属感の高揚が確かに認められた（川上他，2010，2011）。さらに、VTR について“立派な先輩”（特に卒業生の職場での活躍）を適度に抑えることで、程よく学部（学科）への所属意識が喚起された。

川上他（2012a）では、プログラムへの肯定的な評価と、プログラム前の参加者の大学生生活充実度とが関連していることが明らかにされる一方で、教員の対談はそのような状況に左右されずに、参加者に効果を与えることが示唆された。

これらの成果を踏まえた上で、筆者らは、本プログラムを学科・学部を越えて大学全体への帰属感を高めるものに拡張することを企図した。

全学的な学生の帰属感高揚に効果があるプログラム、『大学と私』を確立させるためには、学科混成でのプログラム実施が可能となるよう、VTR を、特定の学科に限らない、様々な学科の先輩たちの語り（同大学 VTR）に変更する必要がある。このため、筆者らは、様々な学科に所属する在學生が「専攻内容を学ぼうと思ったきっかけ」「専攻内容に対する印象の変化」「専攻内容を学んで良かったこと・役立ったこと」「学生生活で一番心に残ったこと・しんどかったこと」「学科のお勧めポイント」「1 回生へのメッセージ」などについて答える、『心理学と私』で使用した VTR と同様の一問一答式のインタビューを実施した。

佐久田他（2014）は、この同大学 VTR を用いた全学対象帰属感高揚プログラム『大学と私』と、特定の学科（心理学科）の先輩が語る VTR（同学科 VTR）を用いた特定学科（心理学科）向け帰属感高揚プログラム『心理学と私』とを異なる年度に実施した。そして、それぞれのプログラムにおける VTR に対する印象評定を参加者に求めた結果、『大学と私』における同大学 VTR も、『心理学と私』における同学科 VTR も、おおむね変わらない印象を与えることが示された。

一方で、当初の『大学と私』においては、教員の対談を、心理学科の教員である筆者らが登壇して行っており、教員の対談に対する参加者の印象評定は、『心

心理学と私』におけるものよりも低かった。そこで、2014年度に実施された『大学と私』においては、教員の対談で登壇する教員を、参加者の所属学科に合わせるようにし、また、VTRをブラッシュアップすることで、プログラムの改良を行った。

その結果、受講生に合わせた教員が登壇した2014年度の『大学と私』は、心理学科教員が登壇した2013年度のものに比べて「教員の対談」に対する評価が一般的に高まり、またプログラム全体として「やる気」が高まるものであることが示唆された(坂田・佐久田・奥田・川上, 2015; 奥田・川上・坂田・佐久田・川野・川端, 2016)。

さらに、川上・坂田・佐久田・奥田(2016)では、『大学と私』が、受講生の、学科への帰属感や大学生生活充実度に与える影響が吟味された。その結果、帰属感高揚プログラム『大学と私』も、受講生の帰属感や大学生生活充実度のうちの、「大学へのコミットメント」を高揚させる効果をもつことが示唆された。

そこで本研究では、特定学科を対象とした『心理学と私』と、全学的なプログラムである『大学と私』との、それぞれの前後における帰属感や大学生生活充実度を直接的に比較検討することにより、『大学と私』が帰属感高揚効果を持つプログラムとして適切に改良されたかどうか検証することを目的とする。

方法

実施概要 本研究で対象とする『心理学と私』は、2011年度、2013年度、2015年度にそれぞれ心理学科の一回生対象の必修科目内において実施されたものである。一方、本研究で対象とする『大学と私』は、2015年度、2016年度に、全学対象の学士課程基幹教育(一般教養系)科目内において実施されたものである。『大学と私』の受講生は複数学科の1~4回生で構成されていた。

調査対象者 『心理学と私』の参加者は、3年度分で150名(平均年齢18.7歳、 $SD=.71$)であり、『大学と私』の参加者は、2年度分で78名(平均年齢19.2歳、 $SD=1.15$)であった。

対象者は大阪樟蔭女子大学の全学部学科1~4回生であり、その大半が1回生であった。

プログラム内容 『心理学と私』についても、『大学と私』についても、基本的な構成は共通している。いずれの帰属感高揚プログラムも、卒業生・在学生へのインタビュー・ビデオ(VTR)と、教員自らの心理学とのかかわりや大学生活に関する語り(教員の対談)

から構成されている。

『心理学と私』においては、VTRは、心理学科の先輩、『大学と私』においては全学科の先輩のインタビューVTRより作成された。また、教員の対談は、『心理学と私』においては、心理学科の専任教員が、『大学と私』においては、プログラムを実施する授業の担当者および、受講生が所属する複数学科の教員が登壇した。

評定項目 プログラム実施前(約一ヶ月前)および実施直後に帰属感尺度(川上・坂田・佐久田・奥田, 2009)と大学生生活充実度尺度(奥田・川上・坂田・佐久田, 2010)の2つの尺度を実施した。

帰属感尺度は、所属学部・学科への帰属感を測定するための1因子14項目からなる尺度が用いられた。

大学生生活充実度尺度として、奥田他(2010)の大学生生活充実度尺度短縮版(SoULS-21)が用いられた。この尺度は、大学生生活の充実度を“大学へのコミットメント”“交友満足”“学業満足”“不安のなさ”の4つの下位尺度(21項目)によって測定する尺度である。

いずれの項目も5件法にて実施された。プログラム実施後には、プログラム内で呈示されるVTRおよびプログラム内容の印象を評定する尺度も実施されたが、本研究ではこの尺度については分析を行わない。

手続き 『心理学と私』についても、『大学と私』についても、プログラムおよび調査は、一連の授業の中で実施されるものであった。質問紙調査による事前データは、一ヶ月程度前の当該授業内で収集された。また事後データは帰属感高揚プログラム終了後、質問紙調査が配付され、実施された。

結果と考察

『心理学と私』と『大学と私』という2つの帰属感高揚プログラムの前後で、帰属感尺度とSoULS-21の4つの下位尺度得点に変化が見られるかどうかを、2(プログラム)×2(実施前後)の2要因混合計画による分散分析を実施し検討した(Table 1)。

その結果、帰属感、およびSoULS-21の“大学へのコミットメント”“不安のなさ”に関して、実施前後の主効果が有意であった(帰属感: $F(1, 219)=21.19, p<.001$ 、“大学へのコミットメント”: $F(1, 226)=30.15, p<.001$ 、“不安のなさ”: $F(1, 226)=6.08, p<.05$)。すなわち、プログラム実施前に比べ実施後に、帰属感と“大学へのコミットメント”が高まり、“不安のなさ”は低下した(Figure 1~3)。“交友満足”および“学業満足”については、実施前後の主効果は

認められなかった。

またいずれの従属変数においても、プログラムの主効果および交互作用は見られなかった。

以上より、『心理学と私』と『大学と私』の両プログラム共に、学科や大学への帰属感とコミットメント、大学生活における不安を高めること、その効果にプログラム間で差はないことが示された。よって、過去の調査結果を踏まえて2014年度に刷新された全学的な帰属感高揚プログラム『大学と私』と、特定学科(心理学科)を対象としたプログラム『心理学と私』とは、帰属感や大学生活充実度に関して同等の効果を持つことが確認された。これは2014年度のプログラムの改良が適切であったことを示唆すると共に、これまで開発してきた帰属感高揚プログラムの内容の妥当性が改めて支持された(プログラムにより帰属感の高揚が生じ、それに最も直結すると考えられる“大学に対するコミットメントの増大”が達成されている)ことを示すものである。

なお、帰属感高揚プログラムが不安を高めるという一見ネガティブな効果が生じる結果については、本プログラムに関する過去の一連の研究(坂田・佐久田・奥田・川上, 2013; 佐久田・奥田・川上・坂田, 2013; 奥田・川上・坂田・佐久田, 2014)でも示されているが、この点に関して我々は、帰属感を高揚させる上で不安が高まることを決して否定的に捉えていない。SoULS-21の“不安のなさ”は、「これからの大学生活をどう過ごしていくか、に不安を感じない」という因子である。プログラムを体験することによる不安の高まりは、むしろ受講生の中に、大学生活を「何となく過ごす」のではなく、正面から考える姿勢が生じた結果としても捉えられると考えられるからである。学生生活、あるいは卒業後の自らの進路について真摯に考えることは多かれ少なかれ不安につながると考えられる。すなわち大学生活に対する将来展望をもつことと表裏一体をなす不安も、結果的に高まったのだと考えられる。帰属感高揚プログラムが、大学の中にいる自分自身に注意を向けることを促すならば、それは、場合によっては将来に対する不安につながってしまうことは避けられない。さらには、こうした不安がその先のモチベーションやコミットメントにつながるものがあれば、これはむしろ将来のポジティブな結果に寄与する不安であるとも考えられる。

今後、こうした大学生活における不安にも、実証的な観点からの焦点を当てつつ、帰属感高揚プログラムの更なる洗練を考えていくことが重要であろう。

付記

本研究の一部は平成26年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の助成を受けて、行われたものである。

引用文献

- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2009). 新入生オリエンテーションに関する研究(5) 大学における所属学科への帰属感高揚プログラムの開発に関する探索的研究 日本心理学会第73回大会発表論文集, 1282.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2010). 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 397.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2011). 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(2) 日本教育心理学会第53回総会発表論文集, 322.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2012a). 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(3) 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1137.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2012b). 心理学部における帰属感高揚プログラム「心理学と私」大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2, 105-112.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2016). 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(9) 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 500.
- 及川恵・坂本真士(2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討—京都大学高等教育研究, 14, 145-156.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子(2010). 大学生活充実感に関する研究(1)—4年度分の調査データに基づく大学生活充実度尺度の短縮版の作成— 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1212.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子(2014). 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(7) 日本心理学会第78回総会発表論文集, 1110.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・川野佐江子・川端康之(2016). 大学における全学科学学生を対象とした帰属感高揚プログラムの開発—2013~2015年度プログラムの比較と「教員の対談」の分析— 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 6, 3-12.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩(2013). 大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(6) 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1104.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2015).

大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 (8)

日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 1126.

佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2013).

大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 (5)

日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 1158.

佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2014).

大学への帰属感と大学生活充実度を高める教育プログラムの開発 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 4, 15-22.

高木浩人 (2003). 多次元概念としての組織コミットメント: 先行要因, 結果の検討 社会心理学研究,

18, 156-171.

山田礼子 (2009). 学生の情緒的側面の充実と教育成果—CSS と JCSS の結果分析から— 大学論集,

40, 181-198.

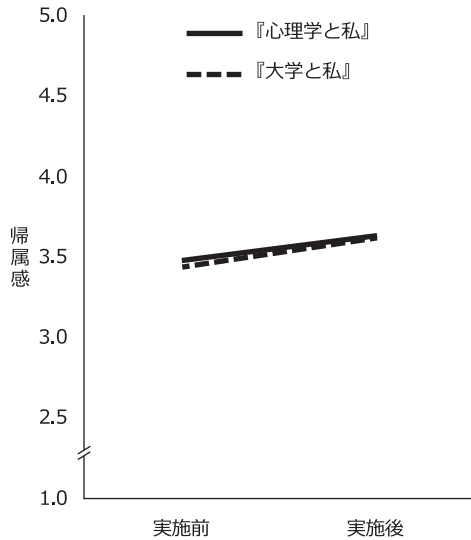


Figure 1 プログラム実施前後の帰属感得点

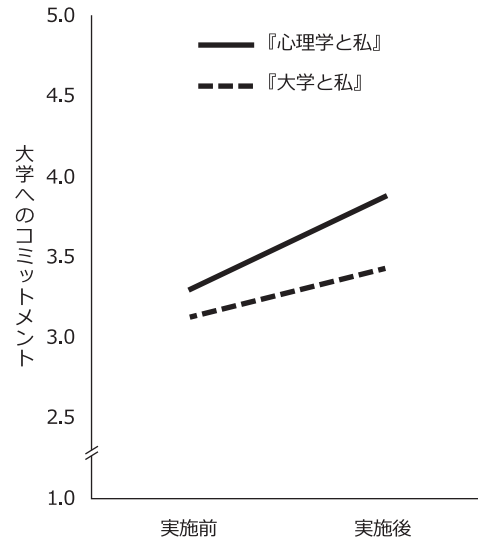


Figure 2 プログラム実施前後の“コミットメント”得点

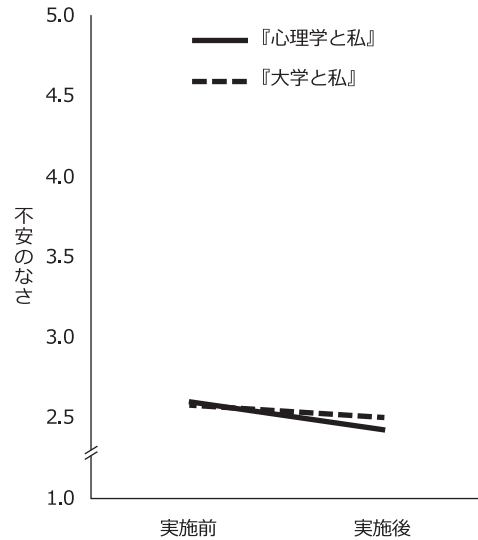


Figure 3 プログラム実施前後の“不安のなさ”得点

Table 1 『心理学と私』『大学と私』実施前後の帰属感尺度と SoULS-21 各尺度の平均値と標準偏差

		度数	実施前		実施後		主効果		交互作用																																																												
			平均値	SD	平均値	SD	プログラム F値	実施前後 F値																																																													
帰属感	『心理学と私』	145	3.48	(0.80)	3.63	(0.70)	0.09	21.19 ***	0.25																																																												
	『大学と私』	76	3.43	(0.76)	3.62	(0.70)				大学への コミットメント	『心理学と私』	150	3.31	(0.86)	3.88	(0.83)	1.12	30.15 ***	2.56	『大学と私』	78	3.12	(0.79)	3.43	(0.87)	交友満足	『心理学と私』	149	3.75	(0.81)	3.72	(0.89)	0.02	0.19	1.94	『大学と私』	78	3.90	(0.81)	3.89	(0.89)	学業満足	『心理学と私』	150	3.55	(0.75)	3.48	(0.78)	1.40	0.11	3.70	『大学と私』	78	3.36	(0.69)	3.45	(0.75)	不安のなさ	『心理学と私』	150	2.60	(0.86)	2.42	(0.89)	0.06	6.08 *	0.99	『大学と私』	78
大学への コミットメント	『心理学と私』	150	3.31	(0.86)	3.88	(0.83)	1.12	30.15 ***	2.56																																																												
	『大学と私』	78	3.12	(0.79)	3.43	(0.87)				交友満足	『心理学と私』	149	3.75	(0.81)	3.72	(0.89)	0.02	0.19	1.94	『大学と私』	78	3.90	(0.81)	3.89	(0.89)	学業満足	『心理学と私』	150	3.55	(0.75)	3.48	(0.78)	1.40	0.11	3.70	『大学と私』	78	3.36	(0.69)	3.45	(0.75)	不安のなさ	『心理学と私』	150	2.60	(0.86)	2.42	(0.89)	0.06	6.08 *	0.99	『大学と私』	78	2.57	(0.71)	2.50	(0.79)												
交友満足	『心理学と私』	149	3.75	(0.81)	3.72	(0.89)	0.02	0.19	1.94																																																												
	『大学と私』	78	3.90	(0.81)	3.89	(0.89)				学業満足	『心理学と私』	150	3.55	(0.75)	3.48	(0.78)	1.40	0.11	3.70	『大学と私』	78	3.36	(0.69)	3.45	(0.75)	不安のなさ	『心理学と私』	150	2.60	(0.86)	2.42	(0.89)	0.06	6.08 *	0.99	『大学と私』	78	2.57	(0.71)	2.50	(0.79)																												
学業満足	『心理学と私』	150	3.55	(0.75)	3.48	(0.78)	1.40	0.11	3.70																																																												
	『大学と私』	78	3.36	(0.69)	3.45	(0.75)				不安のなさ	『心理学と私』	150	2.60	(0.86)	2.42	(0.89)	0.06	6.08 *	0.99	『大学と私』	78	2.57	(0.71)	2.50	(0.79)																																												
不安のなさ	『心理学と私』	150	2.60	(0.86)	2.42	(0.89)	0.06	6.08 *	0.99																																																												
	『大学と私』	78	2.57	(0.71)	2.50	(0.79)																																																															

* $p < .05$ *** $p < .001$

Development of an Educational Program to Boost Students' Identification with Their University

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Masahiro KAWAKAMI

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Hiroyuki SAKATA

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Yuko SAKUTA

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Akira OKUDA

Abstract

Sakuta, Okuda, Kawakami, & Sakata (2008) showed that a sense of identification with the university leads to university life satisfaction. In fostering a sense of identification with the university, we have developed and conducted Identification-Boost-Program of University named "Psychology and I" for freshman of the Department of Psychology. In this program targeted toward the specific department freshman, we show video clip stimuli to them in which junior and senior students talk about their university life, and three or four academicians from the Department of Psychology talk with each other in front of freshman. We have verified the effectiveness of this program (Kawakami, Okuda, Sakata, & Sakuta, 2010, 2011, 2012a, 2012b). We also expanded the program to all freshman in the university regardless their major, and we have developed and conducted the Identification-Boost-Program of University named "University and I" for freshman as an university-wide program. Like with "Psychology and I", we have verified the effectiveness of "University and I". For example, in Sakuta, Okuda, Kawakami, & Sakata (2014), we carried out the Identification-Boost-Program using message-video clips from people in the same majors with the freshman themselves (the same major video clips) and one using message-video clips from other students in every majors (the same university video clips) in different years, and we researched the impression of participant freshman to each program. The results showed that either of the video clip stimuli boosted their sense of identification with the university in general. Based on these studies, we improved the program (e.g. improvement of video clips). The present study compared the improved university-wide program and the program targeted toward the specific department freshman with a concern in the change of student's identification with university and university life satisfaction between pre and post programs. There was evidence that showed an university-wide program boost student's identification with the university as well as the program targeted toward the specific department freshman.

Keywords: students' identification with their university, educational program, university-wide program, university life satisfaction, practical study